

# 地理教育—小・中・高・大それぞれにおける現地学習巡検の実情と展開—

## —1986年春季大会シンポジウム—

オーガナイザー：柏村 一郎・高平 順夫

コメンテーター：奈良部 理・岡本 次郎・木戸口 道彰

### 《趣旨》

社会科の創設以来、わが国の地理教育は、度々困難な局面にたたされてきた。

特に近年は高校における「現代社会」の実施と、これにともなう「地理」の選択化をはじめ、中学校社会科における分野制廃止論の登場など、わが国の地理教育は現在重大な岐路に立たされている。こうした厳しい状況であるにもかかわらず、大学、高校、中学、小学とそれぞれが、それぞれの地理教育の実情、立場などを十二分に理解し得

ていない状況があり、それを打破するため、それぞれが共通の場で考え議論できるものとして、地理の基本でもある校外観察、巡検の指導を、各段階でどう捕え展開したかを通し、地理教育のかかえている問題を検討しようとするのが、本シンポジウムのねらいである。

小学校はこのシーズン、運動会で出席いただかず、「札幌市の小学校における現地学習の実態調査について」と題して市教研協議会の紺野忠一郎君からのレポートによる参加があった。

(高平 順夫)

### 《研究報告》

## 中学・高校における巡検学習の実施について

山内 正明 (藤女子中学校・高等学校)

本校は中学・高校における6ヵ年一貫教育についてもその一貫性や系統性を重視しながら、巡検学習を柱にした有効な学習方法の研究を進めてきた。

本校では中学1年、2年で地理的分野と歴史的分野を並行して履習するいわゆる $\pi$ 型を実施している。また高校では、昭和55年以降現代社会の必須化に伴い地理は選択教科へと後退してしまった。現在は高校1年で現代社会(昭和61年度より政治経済・倫理によって代替)を必須履習し、高

校2年で文系と理系にコース分けを行ない、地理はそのうち文系コース選択者への必須選択教科としている。

巡検学習は中学1年と高校2年の地理選択者(文系コース選択者)を対象に、それぞれの学習の導入として平岸周辺の徒歩巡検と、市内のバス巡検を実施している。

表は巡検学習の実施概要、指導項目、指導観点などとそのコースを示したものである。

	中 学 校	高 等 学 校
実施学年	1年(252名)	2年 地理選択者(165/227名・73%)
フィールド	平岸周辺(図1)	札幌市内(図2)
所要時間	5校時分(8:40~14:00)(5/20時)	4校時分(8:40~12:10)(4/12時)
指導体制	1クラス50名を2名の地理教師が引率指導する。	バス1台約40名を地理教師1名が引率指導する。
巡検方法	地下鉄利用と徒歩による巡検	貸切りバスによる巡検
単 元	身近な地域	地形環境 村落と都市

<p>具体的な 折導項目</p>	<p>大縮尺地図 地形図の読図学習 方位 縮尺 等高線 地図記号など 札幌の地誌学習 小地形(扇状地 河岸段丘 自然堤防 火山性台地など)と人々のくらし 考古学遺跡とアイヌ民族の歴史 開拓使による本府建設および屯田兵 自由移民(強制) 移民 アメリカ人技師などによる開拓 北海道の中の札幌(札幌の中心性) 都市への人口集中と都市の変化 都市問題と都市計画</p>	<p>ー札幌をフィールドとした都市地理ー 都市発達史 都市機能と地域構造(機能分化にともなう地域分化) 都市問題と都市計画 小地形(扇状地 自然堤防 砂丘 後背湿地 河岸段丘 デルタなど)土地利用</p>
<p>巡検学習 のねらい</p>	<p>地理学習への導入 動機づけ(地理的事象への興味関心を引出す) より直接的な体験の重視(歩くこと 五感による教育) 観察の基本的方法を習得させる(個体観察 関係観察 比較観察 機能観察 分布観察 領域観察)自分の位置を地図で確認できる。 地図に表現されてくることを実景観と比較できる。</p>	<p>地理学習への導入 動機づけ(地理的事象への興味関心を引出す 普段見過ごしてしまいそうな地理的事象にも気付かせる。せ 札幌都市機能や地域構造を車窓景観から考察できる自らの生活体験から問題意識をもって観察できる。</p>
<p>中学・高校 に共通した 指導観点</p>	<p>自然と人間社会のかかわりについて考察する。 地域社会の変容に目を向ける。(動態的な地域認識) 生徒の日常的経験から考察できるよう配慮する。 札幌は様々な地理的事象を生徒が直接体験できる最適の教材ではあるが、地理学習をそこから同心円的に拡大していくものではなく、札幌をあくまで1つの窓口として地理学習を展開する。 札幌の郷土誌的学習に止まらず、夫々の地域がかかえている問題点や課題を積極的に取上げる。 地域の多様性を認識する。(運命共同体的郷土感の否定)</p>	

## 札幌市中学校における地理巡検の現状と動向

飯塚 崇教(札幌市立新川西中学校)

### 1. はじめに

昭和61年度に地理巡検を実施している中学校は、全市85校のうち10数校程度という現状である。身近な地域の学習(地理巡検も含めて)への取り組みが、札幌市内の中学校では必ずしも意欲的でないという現状にある。また、地理巡検が実施されていない場合(途中でとりやめになった学校も含めて)の問題点として、次のようなことがあげられる。

- (1) 各教科の実習費増加の傾向にあるので、それ以上社会科として、地図・しおり・バス代等で費用がかさむのは問題である。
- (2) 校内指導体制に問題がある。(事前指導、引卒体制、準備にかかわる労力等を嫌う)  
その他、さまざまな内外からの諸要因があり、社会科担当教師の今後の意欲的な取り組みと、学校の協力体制が望まれるところである。

### 2. 実施後の地理巡検資料を考える

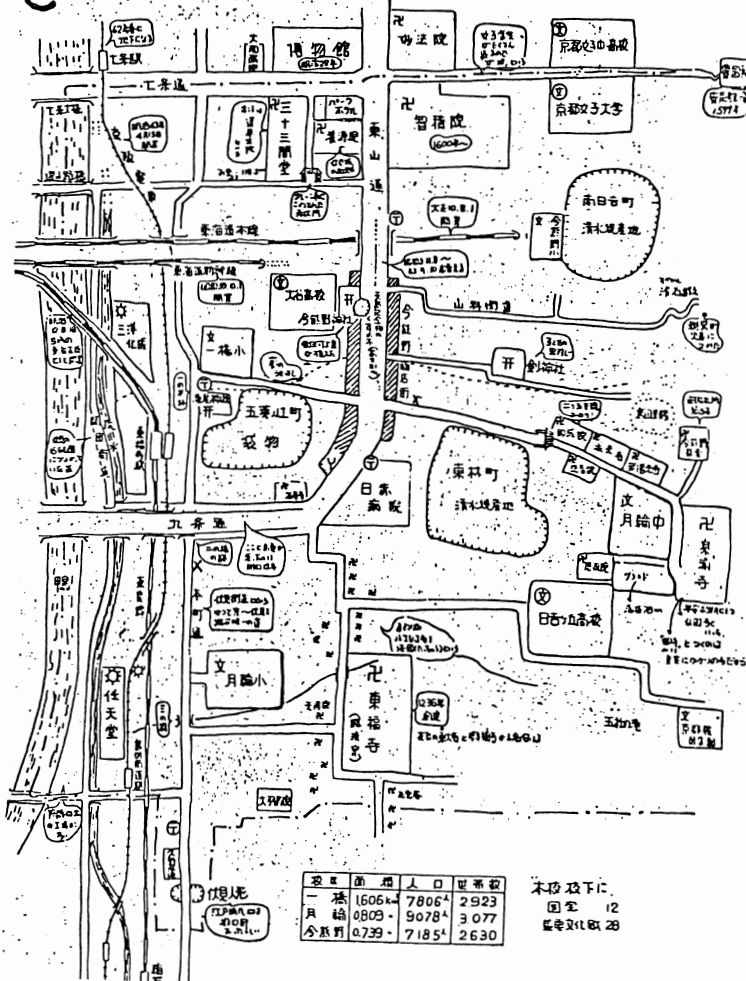
地理巡検を実施している学校は少ないが、その実施内容には学校独自の特性を生かしたものが多く、それらを類別すると、およそ次の3つのタイプに分けることができる。

- (1) 河川に沿ってルートを取り、その周辺地域で特色のあるものを重点的に調査する。(幹線道路沿いに進む方法などもある)  
……………西野中学校
- (2) 事前学習の中で、地域の題材を選び、作業をさせながら地図の利用のしかたを十分に学習させ、校区周辺を詳細に歩いて調査する。  
……………東月寒中学校
- (3) 札幌市全体の中で、特色ある地区を重点的に選び、バスを利用して調査する。  
……………伏見中学校

### 3. 地域素材を選ぶ

身近な地域を学習するためには、まず指導にあ

## C 月輪中学校の校下を見つめよう



京都市月輪中学校の地域図

※フリーハンドで全て書きこまれていることに注目

たり教師側が適切かつ新鮮な素材を選択し、自ら研究する姿勢が重要である。また、小学校等で編さんしている郷土誌を、中学校でも参考にしていきたい。地域を調査する学習は、地理巡検だけではないが、その事例を札幌市立清田中学校の場合にみよう。題材は「生活環境と資源の問題」という公民的分野の内容で、札幌市の下水の汚泥処理とその再利用という素材を用いて授業を展開した。その素材を授業で生かすために、授業者は市役所などをまわって聞き取り調査を行い、パンフレット類を収集、調査分析している。また、下水処理場から直接に汚泥を再利用したコンポスト

(10 kg 入) を持ち帰り、生徒に直接見せている。このような事前準備により、生徒が生きた地域の学習を授業の中で体験できるようにしている。

### 4. 地域の地図をつくる

地理巡検は、地理的分野の学習に対する興味・関心をもたせるため、導入として位置づけられていることが多い。中学1、2年の発達段階では、高度な調査・分析能力を求めることが困難なので、「地図学習が楽しくできる方法」を生徒にしっかり身につけさせるための到達目標が設定され、地理巡検が実施されるのでなければならない。地域

(学校区程度の範囲)の地図を自分たちでつくることを目標とした、京都市月輪中学校の実践例(図示)はその意味で大変参考になろう。

### 5. ま と め

今後の地理巡検(地域学習)に対する課題は次の通りである。

○地理巡検実施上の問題点を、教科や学校の指導

協力体制の改善によって克服する。

○地域の規模を校区程度に限定し、札幌市全域まで広げない配慮をする。

○地域から、新鮮な素材を発見できるような観察眼を養う。

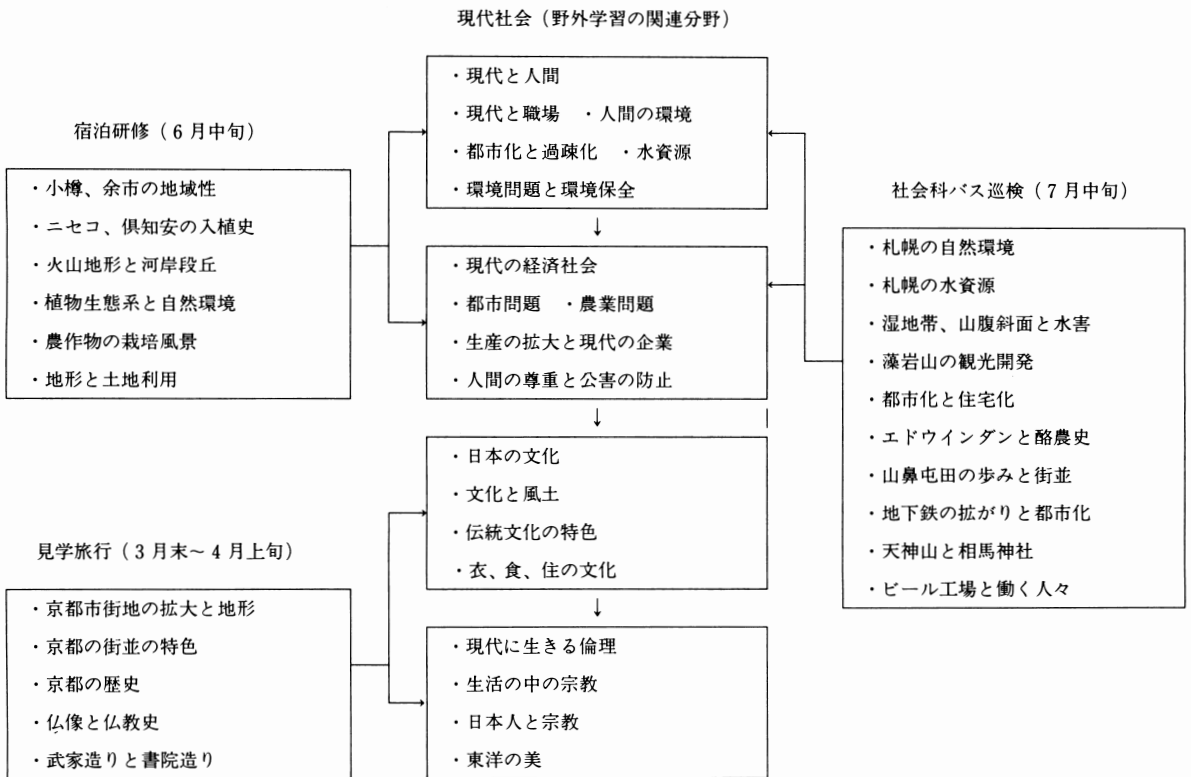
以上、京都市月輪中学校や札幌市立東月寒中学校の実践例が、中学校の地域学習の方法として、一つの指標としながら生かしていきたい。

## 平岸高校における野外学習の実践

浜本 武司(札幌平岸高校)

本校では従来から行なわれてきた宿泊研修や見学旅行の学校行事の機会を利用し、社会科の野外学習を実施してきた。さらに、1年生の「現代社会」でバス巡検をおこない、少しでも地域に対す

る興味関心及び問題意識をもたせ、さらに社会的なものの見方、考え方を身につけさせるよう努力してきた。本校の社会科野外学習を「現代社会」と関連させ構造化すると次の図ようになる。



野外の学習においては、教師が生徒を引きつれて一方的に説明するという従来のパターンをやめ、事前学習にできるだけ時間をかけて生徒の興

味づけをおこない、さらに現地では説明内容を精選して生徒が自主的に活動できる場面も設けてみた。

三つの野外学習を実施するにあたり、指導上の留意点をまとめると次のようになる。

- ・できるだけ内容を精選し、学習目標をはっきりしたものにする。
- ・事前学習には作業学習をなるべく取り入れながら予備知識を与える。
- ・現地では社会事象を確認させ、さらに社会現象の法則性も理解させるようにする。

る。

科学の進歩により過多の情報が目や耳に入り世界は急に狭くなった。生徒達はこれからの社会生活でこれらの情報を自分で精選し正しく判断しなければならぬ。いろいろな学習活動をとって社会事象を正しく見る目を育てていきたいものである。

## 地理実習と地図学習

氷見山幸夫（北海道教育大学旭川分校）

### 1. はじめに

身近にあり一見何でもないことでも、丁寧に観察し地図化すれば、新しい事実が色々分かってくるものである。このような地図化の意義とプロセスを生徒に教えることは、地理教育の基本的役割の一つである。以下に紹介するストリート・マッピングの事例は、小・中学校教員養成課程の学生を対象とした、そのような試みの一つである。

### 2. 路上観察・記録 (mapping)

まず大学構内で道を観察させ、それについて説明させる。意外かも知れないが、当初学生は「それは道である」ということ以外、ほとんど何も言えない。彼らの眼前にあるのは大学構内の道であり、公道と著しく異なる役割・特質を持っている。そこには、大学にふさわしい環境を保つため、並木や屑籠、種々の交通規制の為に標識や路上障害物などが配されている。これらは道を丁寧に観察すればわかるはずである。しかし、事物を眺めることとそれを認識することとは別であり、道のように身近な存在であっても、きちんと観察しなければ、簡単な説明すらおぼつかない。

観察力をつけさせるには、テレビカメラを持たせて道のレポートをさせるのも一法である。道の形状は勿論、その他気の付いたことは何でも（無理矢理！）喋らせる。言葉で表現することにより、初め見えなかった様々なものが見えてくるし、道についての断片的であいまいな知識が、より系統的で鮮明な認識に変化していく。また、対象を自

ら選択し、遠近調節をしながら写すことにより、観察のスケールにも関心が向けられる。

大学から一步外に出れば、構内以上に多彩な道の態様が見られる。歩車道分離されたものもあれば未分離のものもあるし、きちんと舗装されたものもあればこここのジャリ道もある。路上にはバス停もあれば信号機もある。電柱の脇に置かれた一枚の立て札が、周囲の路上空間に、ゴミ置き場という特別の意味を付与していたりする。道路空間は実に多様な意味・役割をもっているのである。学生は、道を注意深く比較観察することを通して、初めてこれに気付く。更に、どうしてあの道は舗装してあるのにこの道は舗装してないのか、街路樹の配列には何か規則性があるのか、などと考えるようになる。

道についてある程度わかってきたら、次に調査項目、表記方法、道の定義、分類などを考えさせる。道路景観、路上設置物、道路沿いの土地・建物の利用や出入口の位置などにも注意を向けさせる。その上で指定地域の調査を行わせ、1千分の1の白地図に観察結果を記録させる。

### 3. 地図作成と読図 (map-making, map-reading)

Mappingの結果を整理させ、綺麗な地図に仕上げさせる。良い地図の要件は、まず正確で且つ見易いこと、それにスケールに見合った量の情報が盛られていることである。また、諸事象がいかなる分布パターンを示し、いかなる位置関係にあるか、何故そうなのか、といったことを考えさせる

必要がある。できあがった地図には多くの情報が盛り込まれているので、それをいきなり読図させるよりは、まず各種事象を個別にトレーシングペーパーなどに抜き出させ検討させるのがよい。そうすると、例えば、消火栓は100m程度の長さのホースで地域全体をカバーできるよう、等間隔且つ規則的に交差点の歩道の隅に置かれている、といったことがわかる。このような規則性は路上観察だけではなかなかわからないが、図化をすれば一目瞭然である。この図を更に丁寧に見ると、消火栓の分布に多少の不規則性があることもわかる。それが何故か、といったことも学生は考えるようになる。その際、現地を自ら調査したことの経験が大いに活きる。地図には示されなかった情報が頭にあり、それが地図を見ることにより呼び戻され、整理されるのである。このように、野外観察と室内作業は相補的な関係にある。

実習を伴わない地図学習では、既存資料の枠内でしか学習できないし、観察力も充分養えない。自ら観察し、図化し、読図する姿勢を身に付けさせることこそが大切である。これは初・中等教育についても言えるのではないかな。

### 《総合討論》

先ず小・中学について奈良部理、次いで中学校について木戸口道彰よりコメントがあった。奈良部は小学校では現地学習が行われ、その一つに「道」もとり上げられている。また地図表現も絵地図などやっている。しかし中学では現地学習が少いが、これにはその指導のできる先生がいないのが問題である。またバス利用でなくとも徒歩学習でやれるのではないかな。いずれにしても事前に調べて歩くような準備が必要である。木戸口も中学で現地学習の指導者の資質に問題のあることを指摘するとともに、校長教頭はじめ一般の先生への理解への努力が求められた。一方に現地学習の評価方法が確立していない欠点も指摘した。高校については現代社会の中での現地学習設定を強調した。

これへの反論として発表者の飯塚、山内より、現地学習の指導者に問題のあることは認めながらも、学校の現地学習に対する姿勢にそれ以上の問題があること、また父兄への啓蒙の必要性などが

あげられた。

高校及び大学については岡本次郎よりコメントがあった。高校では社会科という制約の中で、野外観察は周囲の理解を必要とする現状であるが、観察は科学の基礎であることが強調された。また大学では地理教育の交流の必要性を説いた。これに対し、発表者の浜本、山内より、観察について訓練の必要性、多人数教育、時間と労力などの点から反論があった。関連して大学より進藤賢一・内田実などから多人数授業の中での苦心が披露された。

以上のように「地理教育」のテーマであったが、話題は現地学習（地理巡検）に集中した。これらをまとめると、次のようなものである。①事前学習では小・中・高を通じて地図指導（読図、作業）の重要性の指摘で一致した。②現地学習の実施ではA、重点的に選び出したものをバス利用で見学調査する。B、バス利用で広域にわたり各種事象を観察し相互関係を考える。C、学校中心に徒歩で調査する。以上の3タイプとなるが、小学校はAタイプ、中高校はBタイプが主であり、Cタイプは一部中学で始められた程度である。Cタイプはもっと活用すべきであるとの意見が多かった。③現地学習の問題点は実施しない学校が多いことである。これにはA、費用やカリキュラム関係という外的条件と、B、指導体制や多人数教育という内的条件が指摘された。

なお現地学習の評価の問題が残るが、時間の関係で論議が行われなかった。

参加者の関係で小学校で十分に取上げられなかったが、小一・中一・高の一貫教育ということからも、今後また何らかの機会を捉えて、このようなシンポジウムが開かれることが望ましく、これへの緒口の役割を担えれば有難いと思う。オーガナイザーとして不十分であった点をここでお詫びしておきたい。

（柏村 一郎）